

# GET UP, STAND UP

edition  
#04

あれ、まだ始めてないの？  
スタンダップ、いよいよキテますよ。  
連載4号は、マウイで、本栖で、  
最新 SWEET TOPICS

photography=Darrell Wong(Maui)  
TAKI(Lake Motosu)  
supervised=Osamu(OSM SPORTS)  
screenplay=words-by-toko.com  
取材協力=浩庵荘  
http://www8.plala.or.jp/kouan/  
ナッシュジャパン  
http://www.naishjapan.com/

## 01 SWEET TOPICS

ダウンウインドは、  
追い風とスウェルに乗り続ける  
"LONG DISTANCE GLIDING"  
地球一ぜいたくな散歩

この7月、マウイで、Naish Paddle Cham  
pionships が開催された。マリコベイからカ  
フルハーバーまでの9.5mile (15.2km) を、貿易  
風を背に下るパドリングレースである。  
Naish冠になったのは昨年からだ、4年前から  
レイダウンパドル主体で開催されてきた。  
スタンダップの参加者が増え、今大会には総計  
200名近いレーサーが集まった。

伝えたいのは、レースレポート  
ではない。  
SUP によるダウンウインド、  
その気持ちよさ、ことにマウイ  
ノースショアで行うその、スーパーネイチャー  
スペクタクルな「一生モノ体験」についてである。

今大会には、日本人スタンダッパーとして初めて、  
永松良章プロが参加し、ダウンウインドの走法に

レジェンドな

ハロルド・イギーさん。  
70年代から Naish のカ  
スタムを手がける伝説  
的シェイパー。68歳な  
がらシェイプもスタン  
ダップもばりばりの現役



ついて、Team Naish の Dave Kalama  
世界トップのスタンダッパーといっている に  
レクチャーを受けた。

「パドリングするな」

と、Kalama は言うのだった。

正確には、追い風の推進力を最大限に利用し、最  
小限のパドリングでうねりにテイクオフし、でき  
るだけ長くライドし を繰り返せというのだ。  
風とスウェルに乗り続け、いわばプレーニングす  
ることにより、艇速が上がるし、要所でしかパド  
リングしないので体力も温存される。

うねりを乗り継ぐので場合によってはジグザグに走  
ることになるが、うねりや風向を無視してプロパー  
(ゴールまでの最短直線)で走るよりずっと速い。  
参加選手は7歳から70歳近い方まで広汎だが、  
年配でも速い方はいて、なるほどがつがつパドル

せず、肩からチカラが抜けている。

そしてこの走りは、気持ちいいのだ。

だから、レースのない平日でも、ボードを風上ま  
でトランボし、ダウンウインドするスタンダッ  
パーが沢山いる。

自転車に乗られる方なら、向かい風のつらさと、  
追い風の軽快を良くご存知であろう。追い風が強  
ければ、自転車がまるで原付になったかのように  
感じられる。

SUP は自転車よりも風の影響が強く、さらにう  
ねりに乗れる。ローカルたちは "GLIDING" と  
形容するが、プレーニングとサーフィングが10  
マイル連続するようなものだ。

それもノースショアやハレアカラを望みながら。  
ホキーパでは、ウインドサーファーがジャイブす  
るあたりのややアウトをクルージングする。  
地球一ぜいたくな散歩といっている。

(左から)SUPレースボードは  
14フィート、17フィートと長尺。  
専用のキャリアも必要。「まるで  
ウインドの黎明期、70年代のカ  
イルアのような」とロビーさん  
はいう。SUP をとりまく建設的  
空気がカフルハーバーのゴール。  
さすがに長いレーシングボー  
ドを持っては走れない/子ども  
や女性の選手も多く、雰囲気  
が明るいダウンウインドの魅力



Michi Schweiger(14 feet class winner)

Naish SUP のプロダクトマネージャー。ちなみに永松プロもこの14フィートクラスに参戦し、3位入賞



リラックス&ロングライド、  
次のスウェルに乗り継ぎ、



追い風に乗れ、要所でパドリング、  
スウェルにテイクオフし、加速、



Dave Kalama(17 feet class winner)

このレースのために開発、17フィートと長く、一般的なターンが困難なため、足許の操作でフィンを転舵させる

マリコベアアウトサイドの  
スタートライン。貿易風と太  
平洋のスウェル、スーパーネ  
イチャーに抱かれた者勝ち



# 02

SWEET TOPICS

プラス SUPトリップ、  
ブレイクの兆し  
奥様のおなかも  
縮まっていくことなし

家族を含む、非ウインドサーファーとのウインドトリップは難しいものである。

「ちょっとやってみっか?」といえるほど気軽なスポーツではないし、お父さんとしてはカーボンカスタムのスラロームマシンをオンナ子どもに触られたくないこともありえる。

ひとたび吹き上がるや青筋立ててそっちのけ、丘は風冷えるし、男手抜きでテントの設営やBBQの炭おこし.....やっとな帰ってきたお父さんひとりがハイで上機嫌。これではヨメはフテ、ガキはグレ、老後はわびしくなりかねない。そんなお父さんたちの間で、プラスSUPトリップが流行の兆し、嘘じゃない、この夏、本栖や富津でたくさんみましたよ。

SUPは風がなく、風のときこそ(一般には)楽しい。風待ちに絶好である。道具はデカいがシンプルでかんたん。ライジャケがあれば子どもも安全だし、タンデムだってできる。

奥様がたとえ現在特Lサイズだったとしても、インナーマッスルを鍛え理想的なエクササイズでもあるSUPで引き締まり、むしろ彼女からトリップに誘われるようになるかも知れない。

(上)パドルの水音、野鳥のさえずり、じぶんの呼吸.....サイレントで、これ以上なくスロー/(下)興味深げにボードに見入る隣のキャンパー、「やってみますか」と声をかけてしまう。ウインドではそうはゆかないけれど



# 03

SWEET TOPICS

スタンダップの魅力は  
"Sociality"  
海の上でも友だちが  
そばにいる

この連載を始めてから、筆者(TOKO)は、取材を受けて下さる方に、「SUPの、ユニークで魅力的だと感じる場所は?」という質問を重ねている。シンプルでイージーだが奥が深いとか、エクササイズとして優れているとか、そういう一般論ではなく、その方独自の主観的な評価を。

私自身は、海を自分の行動域にできる自転車みたいな.....と感じるのだが。

Michi SchweigerさんはNaish SUPのプロダクトマネージャーで(詳細はSUPPER PROFILE)そのR&Dやマーケティングのため、世界各国を回っておられる。

「ソーシャルティではないかな」と彼はいった。社交性とか、人とのつながり、といった意味だが.....?

「ウインドサーフィンはビーチではソーシャルティがあるけれど、アウトに出てプレーイングするとひとりになるよね」

「サーフィンは波待ちしながら友と話せる。けれどうねりが入るとその奪い合いが始まる.....」

スタンダップは、スローに、洋上を散歩しながら、友と雑談し、哄笑し、性や老いについての悩みを打ち明けたりすることができる。なるほどそんなスポーツ、ほかにない。

# 04

SWEET TOPICS

艇速・機動性20%UP  
最新トルクパドルテク

SUPのパドルングは元来、動き出した大きな板の慣性を保ち、加速させるため、リズムカルに行うもので、がつがつ漕ぐのは勘違い。

ただ、波越え、テイクオフ、危険回避などのため、急加速させるべき状況もあり、このとき使う、ショートピッチかつトルクのあるパドルングをマスターすると、ライディングにメリハリが生まれ、機動性が高まる。

パドルングは、ホウキで後ろに掃くようにはではなく、アッパーハンドは前方に押しだし、アンダーハンドは手前に引きこみ、シャフトとパドルでとらえた水塊を圧すように。

ここまでは基本、このときさらに背筋をも動員して体重をシャフトに掛け、エクストラパワーを与える。自然上体は前傾し、パドルングストロークに呼応して、お辞儀を繰り返すような動きになる。

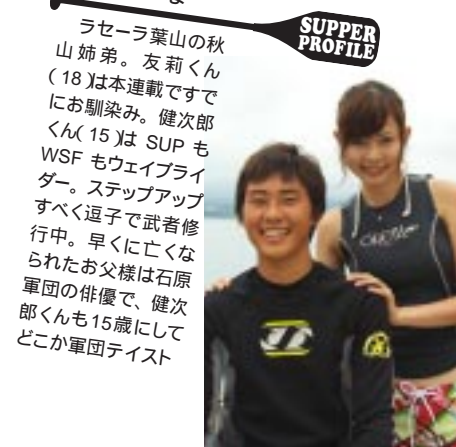
しかし練習が充分でないうちは、自分ではパワフルに漕いでいるつもりでも、パワーがボードにしっかりと伝わってはいないもの。

この永松プロのシークエンスでは、両足が揃ってスタンスが狭く(ボードをローリングさせず駆動力のロスが少ない)、パドルを水に浸す時点で前屈しているが、これは彼が熟達・強靱だから可能なワザで、最初は踏ん張り効くようスタンスを前後に、背筋を使うのはパドルング後半からにしたほうが良いだろう。



ミセイネンな

SUPPER PROFILE



ギョーカイジ的な

SUPPER PROFILE

夫のミックキーさん(39)はオーストリア出身。PWA選手として活躍、ミストラルでロビーと知り合い、Naishへ。現在プロダクトマネージャーとして多忙な日々を送る。ジュリアさんとはガルダ湖でスボックするミックキーさんに惚れ、結婚。ご自身も、撮影、デザインなどNaishの広告製作にたずさわる

ビッグスリーな

SUPPER PROFILE

プロウインドサーファーの永松良章さん(33)、釜口貴晴さん(39)です。スタンダップウェイブライダーとしても活躍中。新城克志プロを加えた3名が、日本のBIG3といっているでしょう。すごい筋肉ですが、SUPでこーなったというより、基本もともとです



# 05

SWEET TOPICS

インレイルも、  
テイルシンクも  
忘れて、スムーズターン

ボードに立って両腕でブームを操作することになれているウインドサーファーは一般にSUPの上達が早い。だがターンについては戸惑うことが少なくないようだ。

ショートボーダーはインレイルを、ロングボーダーはテイルを沈めてピボットの、などと勘違いしてしまうのだが、セイルのないSUPはWSFよりずっと艇速が低い。

SUPは、ボード中央付近にスタンスすることで、ストレートなアウトラインとロッカー部分が接水し、推進性と直進安定性を発揮するように、ステップバックするとテイルロッカー部分が接水し、片タックを漕ぐことで、ボードが容易にターンするよう設計されている。

だから、テイルを沈めよう意識すると後ろ加重になりすぎるし、カービングする艇速もないのにインレイルを沈めようなどとすると当然バランスを崩してしまう。「テイルロッカーを接水させる」とだけ、シンプルにイメージしよう。

本連載のマスコット、友莉くんのシークエンス、6月号と較べるとかなり上達している。ターン中、(視線でリードされる)腰が常に進行方向に向いているところがいい。ボードに対し腰が横向きになると沈につながる。

ただ視線はノーズに落とすのではなく、もっと遠くに向けた方がいいけれど。

